

中国江蘇省宜興市の 小中学生における アレルギー性鼻炎疫学調査

三好 彰・程 雷・殷 敏・時 海波・白川 太郎
 (南京医科大学国際鼻アレルギーセンター)
 稲川 俊太郎・中山 明峰・稲福 繁(愛知医科大学耳鼻咽喉科)
 幸野 健(市立吹田病院皮膚科)

はじめに

われわれはこれまで世界各地における1万数千人の調査から①アレルギーの頻度は経済発展国の方が途上国より多いこと、②同じ地域内では年令の高い被験者の方が低い被験者より多いこと、③前記の年令による変化は同一被験者の経時的観察でも確認できること、を明らかにした。

これらの成果を再確認する目的から、われわれは南京医科大学を中心に定点観測を実施するとともに他のいくつかの地域で疫学調査を実施した。

調査実施地域

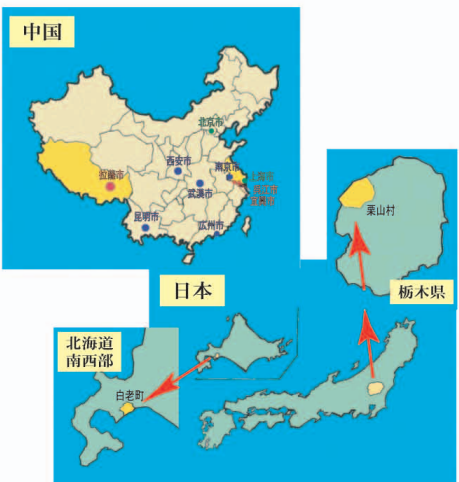


図1: 調査地の地図。今回、日本での北海道白老町・栃木県栗山村の小中学生のスクラッチテスト陽性率と江蘇省呉江市黎里鎮・江蘇宜興市・チベットラサ市の小中学生の陽性率を比較した。



図2-3: われわれは南半球ではブラジルのペルナンブコ州マカパラにて調査を行っているが、口頭で述べる理由から今回は触れない。

調査風景



図4: 江蘇省南京市の南京医科大学にて。



図5: 広東省広州市の中山医科大学にて。



図6: 雲南省昆明市の昆明医科大学にて。



図7: 湖北省武漢市の湖北医科大学にて。



図8: 陝西省西安市の西安医科大学にて。



図9: 北海道白老町にて。



図10: 栃木県栗山村にて。



図11: 江蘇省呉江市黎里鎮にて。



図12: チベット・ラサ市にて。



図13: 江蘇省宜興市にて。



図14: 可能な限りアレルゲンとなる家屋内のダニ採取や花粉測定は実施する。ラサ市のチベット族家庭にて。

対象・方法

- | 対象 | 方法 |
|------------------------------|-------------------|
| ・北海道白老町の小1・小4・中1の2,677例 | ・自覚症状に関するアンケートを実施 |
| ・栃木県栗山村の小1・小4・中1の218例 | ・鼻鏡検査 |
| ・江蘇省呉江市黎里鎮の小1・小4・中1の752例 | ・スクラッチテスト |
| ・江蘇省宜興市鎮陶部の小1・小4・中1の370例 | |
| ・チベット・ラサ市堆龍徳慶県の小1・小4・中1の228例 | |

図15: 被験者はその地域に在住する特定の年齢の構成員全員とする。

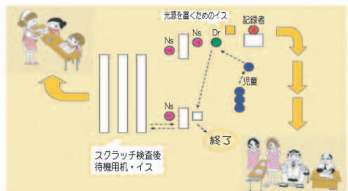


図16: 調査方法

調査結果

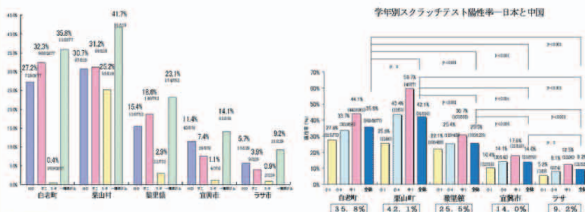


図17: HD・ダニ・スギ花粉・3種のアレルゲンのうち1種以上に陽性反応を示した症例の頻度。白老町はスギ花粉飛散が見られないため栗山村よりやや低いが、日本の2地域・黎里鎮・宜興市・ラサ市の順となる(カイ2乗検定)。

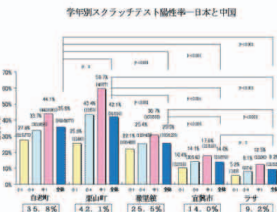


図18: 年齢別に見た頻度。いずれの地域においても6・9・12歳と、年令の上昇に伴い頻度は増加する(カイ2乗検定)。



図19: 宜興市の調査における皮膚科医の視診。



図20: アトピー性皮膚炎の頻度は日本よりもかなり低い。

まとめ

- われわれはこれまでに世界各地における1万数千人の調査から、①アレルギーの頻度は経済発展国の方が途上国より多いこと、②同じ地域内では年令の高い被験者の方が低い被験者より多いこと、③前記の年令による変化は同一被験者の経時的観察でも確認できること、を明らかにした。
- これらの成果を再確認する目的から、われわれは南京医科大学を中心に定点観測を実施するとともに、他のいくつかの地域で疫学調査を実施している。
- こうした地域差の比較とともに定点観測を継続することにより、経済発展に伴うアレルギー増加とその環境要因を明確にできる可能性がある。